

卒業生英語教員のコミュニティ構築に向けた基礎研究

—卒業生教員へのアンケート調査の報告—

工藤洋路・米田佐紀子・森本 俊

要 約

本報告は、小・中・高等学校の教壇に立っている本学の文学部の卒業生を対象とした英語教員へのアンケート調査により、卒業生教員が参集し交流することを想定した卒業生英語教員コミュニティを構築する上で必要な情報を分析したものである。アンケート調査では51名分の回答が得られ、その結果として、コミュニティへの期待は一定程度あり、構築されたコミュニティにおいて参集の機会があった際には、授業の実践発表を視聴したり、大学の教員からの講義などを受けることを期待していることが分かった。この調査をベースにして、今後、卒業生英語教員が集う会を開催することを検討したい。

キーワード：卒業生英語教員、英語授業、卒業生コミュニティ

1 研究の背景

「卒業生英語教員のコミュニティ構築に向けた基礎研究」と題する本研究は、令和4年度の文学部の共同研究として実施してきたものであり、本稿は同年度に卒業生教員を対象に実施したアンケート調査の報告である。本共同研究は、平成30年度から令和2年度の3年間の継続研究として実施した令和3年度の共同研究「現職の英語教員に必要な能力の可視化の試み」の後継となる研究として位置付けるものである。この4年間の研究の結果、文学部比較文化学科および英語教育学科を卒業して小・中・高等学校に教員として赴任した卒業生の多くが、日々の授業作りや中長期的な視野を持った指導などにおいて、課題や悩みを抱えていることが判明した。そこで、本研究は、卒業生英語教員が持つ悩みや課題を解決する「場」としてのコミュニティを構築するための基礎研究を行うことを目的としてスタートした。このコミュニティは、卒業生英語教員が情報交換を行い、各自が持つ課題を解決する機会となる場を想定している。

卒業生英語教員コミュニティは、昨今の教育事情を考慮すると、その位置付けが非常に重要なものであると考えられる。令和2年度から年度ごとに小中高の順で新課程が開始されたが、この3年間はコロナ禍であったことから、新課程への移行に関わる業務に加えて、コロナ対応

に追われ、小中高の現場は極めて大変な状況であったことは、卒業生の教員の悲痛な声として我々大学の教職担当教員にも届いていた。特に、ここ数年間の新任教員にとっては、初任者研修が中止になったり、運営および指導する側もそのノウハウがまだ確立していなかったオンライン型の研修を受講したりするなど、コロナ前と比べると、十分な研修を受けることが困難な状況であった。令和4年度になってからは、教育委員会および現場の努力により、研修もコロナ前と同様の形式の対面型を再開するなど、まだ続くコロナ禍にあっても、オンラインの特性も活かしつつ、全体として充実した研修が開催されるようになってきたことを耳にすることが多くなった。しかしながら、コロナ前の研修に戻ったにせよ、初任者研修を始めとする教員研修は十分であるとは言えないことは、これまで行ってきた卒業生英語教員に対する調査でも示されてる。加えて、令和4年7月に教員免許更新制が廃止された。文部科学省によれば、単なる廃止ではなく、今後のより良い教員研修制度に置き換わっていくための「発展的解消」ではあるものの、新しい制度等が具体的に始まるまではいくらか時間を要する。このような状況を踏まえると、大学として、卒業生英語教員が集い、情報交換といったカジュアルな場とともに、何らかの研修を施すことができる場としての「コミュニティ」を構築する意義は高いと言える。そこで、本研究では、卒業生英語教員が日々の指導で抱える悩みや課題等を調査し、それに加えて、彼らがコミュニティの必要性を感じているかどうかを調べることを目的として、卒業生英語教員を対象としたアンケート調査を実施した。

2 アンケート調査の結果と考察

本研究で実施した卒業生英語教員を対象としたアンケートは、3つのテーマから構成されている。1つ目は、英語の指導に関わる悩みや課題である。具体的には、どのような事柄の指導に難しさを感じているかに加えて、授業時数や自身の英語力などについて、何らかの課題を認識しているかを問う項目を作成した（項目の詳細は表2を参照）。2つ目は、悩みや課題があった場合、どのように解決を図っているかに関わるものである。具体的には、誰に相談するか、そして、研修会へ参加をするかなどを尋ねている（項目の詳細は表3を参照）。そして、3つ目は、コミュニティの必要性に関わる点である。コミュニティへの興味に加えて、コミュニティではどのような内容を扱ってほしいかなどを尋ねている（項目の詳細は表4を参照）。これら3つのテーマを合わせると合計47項目となった。また、コミュニティへの参加方法として望むものを以下の4つから選んでもらった（複数回答あり）。

- ・対面型（例：玉川大学で開催）
- ・オンラインの同時双方型（例：Zoomなどでのリアルタイムでの開催）
- ・オンラインのオンデマンド型（例：録画した講義などを好きな時間に視聴）
- ・ハイブリッド型（対面型とオンライン同時双方型の統合）

最後に、コミュニティについての考えや要望があれば、自由に記述する枠を設けた。アンケートは、GoogleのFormsに掲載し、最初に調査協力への同意を求める文書を組み込み、同意へのサインをした教員のみ、各項目に回答してもらった。回答をした教員は51名であった。51名の教員の内訳は次の表1の通りである。

表1 回答者内訳 (51名)

勤務校種	人数	教員歴				
		1年目	2年目	3年目	4～6年目	7～10年目
小学校	17名	3名	3名	6名	4名	1名
小中一貫校	1名	1名				
中学校	20名	3名	8名	1名	8名	
中高一貫校	2名		1名	1名		
高等学校	10名	2名	1名	5名	2名	
小中高一貫校	1名				1名	

以下、テーマごとに結果の概要を報告する。

1) 指導上の悩みや課題

英語の指導や授業に関わる悩みや課題については、表2が示す通り、29項目を設定した。表2では、4つの選択肢（とてもあてはまる／まああてはまる／あまりあてはまらない／まったくあてはまらない）のそれぞれの回答の割合とともに、これらの選択肢を順に4, 3, 2, 1と数値に置き換えた上で算出した平均値を示している。平均値が2.5を上回れば、各項目にあてはまると回答している傾向が強く、2.5を下回ればあてはまらないと回答している傾向が強いと判断できる。この平均値の上位5つの項目は以下のものである。

- (28) 自身が英語を使う機会が不足している。(平均値：3.39)
- (17) 児童・生徒の学力差が大きいため指導が難しい。(平均値：3.33)
- (26) 授業準備に時間が取れない。(平均値：3.18)
- (8) 書くことの指導が難しい。(平均値：3.14)
- (15) 学習評価全般が難しい。(平均値：3.10)

この5つについては、技能の指導といった特定のものに偏りがあるわけではないことから、教員の悩みや課題がある側面に集中しているわけではないことが分かる。もっとも平均値が高かった「(28) 自身が英語を使う機会が不足している。」については、今回の回答者の半分以上が留学を経験した英語教育学科の卒業生であることから、卒業後に、英語を使う機会が少なく

なったことに対して敏感であったことが想像できる。この結果からは、卒業生コミュニティの場が実現した際には、カジュアルに英語で近況報告をする時間を設けるなど、英語を教える場面以外に、英語を自身のコミュニケーション目的で使用する機会を作る意義が示唆される。(17)と(8)の項目については、一般的に、音声面よりも文字面、特にライティングの面において、児童や生徒の学力差や習熟度に差が付きやすいとされていることから、この2項目が悩みの上

表2 指導上の悩みや課題に関わる項目の回答結果 (51名分)

	とてもあ てはまる [4]	まああて はまる [3]	あまりあ てはまら ない [2]	まったく あてはま らない [1]	平均値
1 中長期目標を考えるが難しい。	33.3%	45.1%	17.6%	3.9%	3.08
2 単元計画を考えるのが難しい。	25.5%	35.3%	35.3%	3.9%	2.82
3 指導手順や指導展開を考えるのが難しい。	15.7%	39.2%	39.2%	5.9%	2.65
4 英語で授業を進めるのが難しい。	17.6%	37.3%	35.3%	9.8%	2.63
5 聞くことの指導が難しい。	17.6%	37.3%	39.2%	5.9%	2.67
6 読むことの指導が難しい。	25.5%	43.1%	25.5%	5.9%	2.88
7 話すことの指導が難しい。	27.5%	45.1%	25.5%	2.0%	2.98
8 書くことの指導が難しい。	39.2%	39.2%	17.6%	3.9%	3.14
9 文法の指導が難しい。	9.8%	39.2%	35.3%	15.7%	2.43
10 語彙の指導が難しい。	13.7%	45.1%	33.3%	7.8%	2.65
11 発音の指導が難しい。	35.3%	39.2%	17.6%	7.8%	3.02
12 本文の指導が難しい。	13.7%	31.4%	41.2%	13.7%	2.45
13 言語活動の作成が難しい。	21.6%	49.0%	27.5%	2.0%	2.90
14 定期考査の問題作成が難しい。	17.6%	31.4%	19.6%	31.4%	2.35
15 学習評価全般が難しい。	39.2%	39.2%	13.7%	7.8%	3.10
16 パフォーマンステストの作成と実施が難しい。	29.4%	47.1%	17.6%	5.9%	3.00
17 児童・生徒の学力差が大きいため指導が難しい。	51.0%	33.3%	13.7%	2.0%	3.33
18 同じ授業を担当している同僚との調整が難しい。	15.7%	19.6%	31.4%	33.3%	2.18
19 入試への対応が難しい。	13.7%	35.3%	23.5%	27.5%	2.35
20 ICTを活用した授業実践が難しい。	5.9%	43.1%	25.5%	25.5%	2.29
21 小中連携・中高連携といった校種間連携を意識した指導が難しい。	25.5%	43.1%	23.5%	7.8%	2.86
22 教科書のレベルが適切ではない。	11.8%	27.5%	49.0%	11.8%	2.39
23 授業時数が足りない。	13.7%	37.3%	39.2%	9.8%	2.55
24 自分の理想の授業ができていない。	29.4%	47.1%	19.6%	3.9%	3.02
25 育成すべき資質・能力がわからない。	3.9%	35.3%	47.1%	13.7%	2.29
26 授業準備に時間が取れない。	45.1%	31.4%	19.6%	3.9%	3.18
27 自身の英語力が不足してる。	31.4%	47.1%	19.6%	2.0%	3.08
28 自身が英語を使う機会が不足している。	54.9%	33.3%	7.8%	3.9%	3.39
29 学校教育の中で英語の指導の優先度は低い。	23.5%	29.4%	33.3%	13.7%	2.63

位にあることは容易に理解できる。この点は現場での喫緊の課題であると言える。

次に、悩みや課題に関するものとして、平均値がもっとも低い5つの項目を取り上げてみる。

- (18) 同じ授業を担当している同僚との調整が難しい。(平均値：2.18)
- (25) 育成すべき資質・能力がわからない。(平均値：2.29)
- (20) ICTを活用した授業実践が難しい。(平均値：2.29)
- (19) 入試への対応が難しい。(平均値：2.35) (小学校教員を除く平均値：2.76)
- (14) 定期考査の問題作成が難しい。(平均値：2.35) (小学校教員を除く平均値：2.79)

(19) と (14) については、入試や定期考査がテーマのため、小学校の教育実践にはあまり関わらない点である。実際、小学校教員の回答を除いて新たに平均値を算出したところ、ともに2.7点台となり、2.5を超えていることから、どちらかという、課題や悩みとして存在する傾向が強い内容となった。もっとも平均値が低かった「(18) 同じ授業を担当している同僚との調整が難しい。」については、これまで英語指導の大きな課題の一つとして同僚性を挙げる教員が多かったが、同僚性に関わる問題は今回の結果からはあまり見られないということが分かった。特に今回の回答者のような若手教員にとっては、先輩の教員から学びながら自身の能力や教育観を高めていくことが必要なため、今回の結果は非常に好ましいと言える。また、「(20) ICTを活用した授業実践が難しい。」については、平均値が2.5を下回っている。今回の回答者が若い教員が多いということを考慮すると、ICTという新しい教育技術の使用については問題はあまり見られないということで、ICTの活用が一層重視されている現在の状況から見て、この回答結果は好ましいと言える。

ここまでは、課題や悩みに関する項目の平均値の上位と下位に位置づくものを概観してきたが、この結果は、卒業生英語教員が集うコミュニティを開催した際に、参加教員同士で話し合うテーマ等を決める際に役に立つと言える。

2) 指導上の悩みや課題の解決方法

ここでは、指導上の悩みや課題があった際にどのように対応しているかに関わる項目の回答結果を概観する。表3が示す通り、「(30) 勤務校の同僚の先生に相談する。」については、「とてもあてはまる」と「まああてはまる」の両方を合わせると80%を超えることから、普段もっとも近くにいる同僚の教員に相談する機会が取れているということである。これは非常に好ましいことだと言える。これは、表2で示した「(18) 同じ授業を担当している同僚との調整が難しい。」について、あてはまらないと回答している教員のほうが多いことと関係していると考えられる。普段、同僚の教員に相談ができていたため、授業の進め方や指導の方法を合わせることが容易になっていることが推察できる。このように、日常の悩みや課題が同僚への相談によってある程度解決していることが期待できるのであれば、本研究で想定している卒業生教

員の集まりの場においては、それほど多くの悩みや課題を扱う必要がなく、今後の教育を一層充実させるための手段を話し合うなど、より発展的な内容について議論をする場としてのコミュニティとすることが考えられる。一方で、項目の(33)の「教員をしている出身大学の同期や先輩・後輩に相談する。」についても、「とてもあてはまる」と「まああてはまる」の両方を合わせると6割近くになるため、同僚の教員に相談をしているだけではなく、本学の卒業生同士での助け合いも一定の割合で行われていることが分かる。このことから、同僚の教員と卒業生教員とでは相談する内容が異なるのかどうかということなどを今後の研究で明らかにした上で、コミュニティで扱う内容等を検討していく必要があると言える。

項目(38)の「自身の英語力を伸ばすための機会を作る。」については、「とてもあてはまる」と回答した教員がわずかであったが、これは、表2で見た「(28)自身が英語を使う機会が不足している。」が、もっとも平均値が高い項目であったことと関連していると考えられる。教員研修の一環として、いかにして自身の英語力を高める時間を確保するかが今後の課題である。

表3 指導上の悩みや課題の解決方法等に関わる回答結果 (51名分)

		とてもあてはまる [4]	まああてはまる [3]	あまりあてはまらない [2]	まったくあてはまらない [1]	平均値
30	勤務校の同僚の先生に相談する。	37.3%	47.1%	9.8%	5.9%	3.16
31	他の学校の先生に相談する	17.6%	37.3%	33.3%	11.8%	2.61
32	出身大学の教員に相談する。	5.9%	25.5%	49.0%	19.6%	2.18
33	教員をしている出身大学の同期や先輩・後輩に相談する。	19.6%	39.2%	25.5%	15.7%	2.63
34	地域の指導主事など指導する立場の人に相談する。	9.8%	15.7%	25.5%	49.0%	1.86
35	本や資料などで調べる。	33.3%	56.9%	5.9%	3.9%	3.20
36	学校や地域の研修会に参加する。	17.6%	35.3%	33.3%	13.7%	2.57
37	学会や民間の団体の研修会やセミナーに参加する。	7.8%	19.6%	39.2%	33.3%	2.02
38	自身の英語力を伸ばすための機会を作る。	5.9%	41.2%	43.1%	9.8%	2.43
39	教員をしている出身大学の人から英語の指導について悩み相談を受けることがある。	2.0%	27.5%	41.2%	29.4%	2.02

3) コミュニティへの興味

ここでは、卒業生英語教員のコミュニティへの興味とともに、コミュニティにどのようなことを期待しているかに関わる内容を見ていく。表4の「(40)コミュニティに興味・関心がある。」の結果が示す通り、本研究で構想を練っている卒業生英語教員のコミュニティについては、一定程度の興味・関心が見られた。この興味について、表2で示した悩みや課題との関連性を調

べるために、(40)の項目と(1)～(29)の各項目の相関係数を算出したところ、すべて-0.28から0.29の範囲に収まった。この結果から、何らかの指導上の悩みや課題を抱えているからと
 いて、このコミュニティに興味や関心があるというわけではないことが分かる。したがって、
 卒業生が集まる場を提供した際に、悩みや課題の共有といったいわゆる「ネガティブ」なテーマ
 設定は受け入れられる可能性が低いと考えられる。実際に、(42)の「コミュニティでは、
 英語の授業に関する自身の悩みや課題を提示して、その解決策を議論してほしい。」の結果では、
 「とてもあてはまる」が20%少々しか見られないことから、悩み相談が前面に出るような会には
 しないほうがよいと言える。

表4 コミュニティへの興味に関わる項目の回答結果 (51名分)

		とてもあ てはまる [4]	まああて はまる [3]	あまりあ てはまら ない [2]	まったく あてはま らない [1]	平均値
40	コミュニティに興味・関心がある。	31.4%	43.1%	21.6%	3.9%	3.02
41	コミュニティによる会が開催された場合、積極的に参加したい。	25.5%	49.0%	19.6%	5.9%	2.94
42	コミュニティでは、英語の授業に関する自身の悩みや課題を提示して、その解決策を議論してほしい。	21.6%	62.7%	9.8%	5.9%	3.00
43	コミュニティでは、他の先生の実践発表を聞きたい。	51.0%	41.2%	7.8%	0.0%	3.43
44	コミュニティでは、大学教員の講義や演習を受けたい。	43.1%	35.3%	15.7%	5.9%	3.16
45	コミュニティでは、チャットや掲示板などで、情報交換をしたい。	33.3%	49.0%	15.7%	2.0%	3.14
46	コミュニティでは、飲み会など、カジュアルな場がほしい。	27.5%	39.2%	25.5%	7.8%	2.86
47	同期など数人程度の集まりであれば(あるいはそれ以上のものも含めて)、すでにコミュニティができています。	11.8%	39.2%	27.5%	21.6%	2.41

コミュニティに期待されていると思われることは、「(43) コミュニティでは、他の先生の実
 践発表を聞きたい。」について、「とてもあてはまる」が51.0%であることから、他の先生の実
 践から学ぶことであると言える。特にここ数年はコロナ禍で、他の教員の授業を参観する機会
 があまり取れなかったことも、この項目の値が高い理由だと言える。コミュニティでは、複数
 の教員の実践発表を視聴した上で、参加者同士で話し合うといったことが期待値が高そうであ
 る。また、「(44) コミュニティでは、大学教員の講義や演習を受けたい。」についても一定の
 期待があることが分かる。大学の教員の講義を受けることで、初心に戻ることに加えて、現在
 実践していることの理論的なバックアップを求めているのかもしれない。あるいは、もう一度

学び直すということのニーズがあるのかもしれない。現職教員による実践発表に加えて、大学の教員による講義も取り入れながら、コミュニティの内容を精査していくことが必要であると言える。

4) コミュニティの開催方法

コミュニティの開催方法については、表5が示す通り、大学での対面型を希望する教員が多かった。これは、コロナ禍において卒業生同士がカジュアルに集まる機会も含めて交流が少ないことが一つの理由と考えられる。また、教職メンバーは在学時にほぼ同じ授業を4年間に渡り履修していることで一種の一体感があると言えるが、ここ数年間はコロナ禍のため卒業式や卒業パーティーが中止になったりしたこともあり、卒業時にメンバー全員で教員免許状を晴れて取得したことのお祝いができなかったことなども、対面型への期待の大きさの一因とも言えるかもしれない。一方で、特に地方で教員をしている場合は対面での参加が難しいことからオンラインへの要望もかなり多くある。したがって、開催方法については一つに定めずに、複数の方法を順番に繰り返して実施することなども検討していくことが必要となる。

表5 希望するコミュニティへの参加方法 (51名分：複数回答あり)

	選択した人数	選択した割合
対面型 (例：玉川大学で開催)	31名	60.8%
オンラインの同時双方型 (例：Zoomなどでのリアルタイムでの開催)	29名	56.9%
オンラインのオンデマンド型 (例：録画した講義などを好きな時間に視聴)	21名	41.2%
ハイブリッド型 (対面型とオンライン同時双方型の統合)	14名	27.5%

今回のアンケート調査から得られたコミュニティに対する期待や、その背後にあると思われる普段の教育実践などを、今後さらに分析および検討をした上で、まずは、一度、コミュニティ構築のために卒業生英語教員が集う会を開催することが必要であると言える。令和5年度についても、本研究の継続研究を同じく文学部の共同研究として実施できる予定であることから、令和5年度の早い時期に一度会を開催することを検討していきたい。

最後に、本アンケート調査に快く協力していただいた卒業生英語教員の皆さんに感謝を申し上げます。

参考文献

工藤洋路・鈴木彩子・日臺滋之・松本博文 (2019) 「英語教職課程の学生が修得すべきコンピテンシー

- の研究と Can-do リスト作成の試み—4年次報告—『玉川大学文学部紀要 論叢』59, 47-70.
- 工藤洋路・松本博文・小田眞幸・鈴木彩子・日臺滋之・米田佐紀子 (2020) 「卒業生英語教員の実態調査報告」『玉川大学文学部紀要 論叢』60, 1-22.
- 工藤洋路・日臺滋之・米田佐紀子・森本俊 (2022) 「コロナ禍の小・中・高の英語授業および初任者教員研修の調査報告」『玉川大学文学部紀要 論叢』62, 1-12.

(くどう ようじ)

(よねだ さきこ)

(もりもと しゅん)

A Basic Survey on Building an Alumni Community of Graduate English Teachers

Yoji KUDO, Sakiko YONEDA, Shun MORIMOTO

Abstract

This paper reports on the results of the questionnaire conducted to 51 graduate English teachers who teach at elementary, junior high and high schools, for the purpose of building an alumni community. The results show that there is a certain level of expectation for the community, and that when the community is established and they have an opportunity to gather, they expect to learn from other teachers' teaching practices and to receive lectures from university faculty members. Based on this survey, we would like to consider holding a meeting of graduate English teachers in the near future.

Keywords: Graduate English teachers, English classes, alumni community